

子孫寶草  
完

□ 9  
4191



2 3 4 5 6 7 8 9 40 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50 1 2 3 4 5 6 7 8 9

門口 9  
號 4191  
卷



49-2689

分類  
卷番  
340

身奉我德澤爾浩。飽乎。嗚呼。贍不羣也。  
皆生祖父每の惠。未だ。過所。會歟。小  
ちうき。行。りを。の。づれ。ど。行。餘。力。あれ。ハ  
聖。代。書。を。も。見。侍。す。中。に。其。主。事  
誰。とも。わ。の。あ。ば。ど。素。ひ。於。人。さ。る。又。人。を  
教。す。か。れ。草。城。す。ま。女。意。味。乃。也。川。大。多。義  
感。が。此。あ。ず。京。に。裏。東。の。土。を。え。い。る。様。有  
の。ぼ。や。永。傳。へ。ん。男。女。何。と。名。は。無。む。れ。る。

首をとづけ。折る。義理をすこしもあらず  
結ゆく。丹草亭を一覽す。津や書院子孫之  
傳ふるまほ金すもあらず。山堂をすくと云  
給ひ。其まへ号すれど子孫寶草と云ふ。  
校倉をねぶい侍ゆゑもよし

文化十二年丙子株

伊藤芳脩謹誌

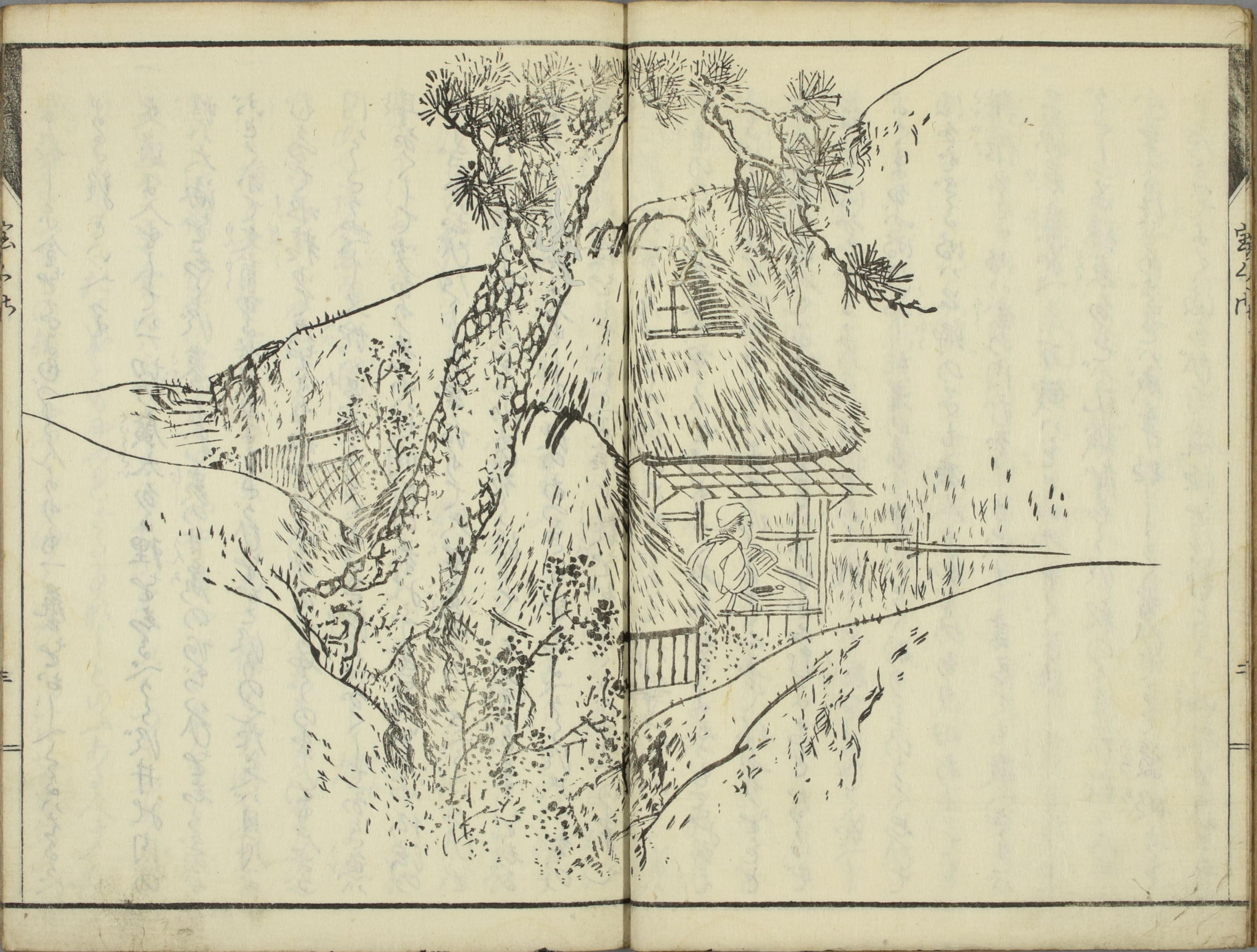
子孫寶草

一千卷万巻の書とつても千句万句の理と聞ても千種と守らば  
おおなむぬ時ハ無益ののみ半て学問も半身のむごかひ  
志をなべさんが爲て一句一言の理を呴てもよく道理を食らうと  
ぬくもぬハ千種とかひ一切の事へよろずとよ

一何ゆうのまじ人もほにあのあれ隊ハ空きの星琳ともこそ志は  
学問も成べ。又後世の修竹も本だまこと毛を以て妙を  
主人ちあら人の隊はなまといハ志のあきゆゑありはせば、  
ゆくがむねたひへあるむむかどかて日をうしめを樂とひせざ  
なり。学問して義理とよくあまくわてんの内よ歎樂とを  
一人の毛と免ねづきのハ書籍て子孫へづくんふも毛よぬくま

生まへ育てうじて書も時へいつと取くむれど又もよりむきと  
身もば自然よ文字も見えゆ。徳あり文字と見えぬと、バ義理を  
あそびし義理あられバ志殊の道よ入ふもあがくに身もおさはす  
家もやうのひ仁義礼智信のふれどよくはもうてひめやム法の  
ふ戒一まよりて功德とあり。赤手の若果よ御る、一毛筆もぞ  
ゆきゆくへうえとねりてニ世の徳ありそのをみどりてハ赤  
きよまゆるまゆれ、終もども貪家少てハ印ひ出づて大金  
書き、毛とあざこつ一巻二巻少ても角ねの用ひとがたきと書を  
求め、重少て見べー南容と云へ、白圭の詩を毎日三度か  
詠吟してはくも書きなるとおり、書よほそくとがいの捷と詠  
をきり、句二句かとも書いてれのかくよ並又、三三展よ見  
ゆるかべよも重くわとひましむべと

子に義雲、能くせざるハ父のあやまつて訓導れおろそく  
師道のとゞり繁父もかくはせ仰よりくもちぎくよあらもすれども  
ざるはふのほそてゆくにきてゆくまでうそを詮すうそをと  
むるハ寛下の人をふにとゞりざるハふをからむよちとなくを  
教へてぬかだざる子ハヨシダ身をあらびて心をまゆくが  
よくまあぶはいやはた者の子もまゆくとく形りきのうく身ひと  
ぬかだざるぬハ久卿の子も廢人とゆきのあり田ありても  
耕作ざるぬハ余の内むかづくもべ書くても敷へざりバ  
ふ豫思廢地べ一萬錢ハ乞とめやもく子孫の賢ハ乞とめ  
ざりふ豫思乞とめば礼儀をあらび親のうきひ教くあり  
小半もはとめざりバ成半形くわひてこそ教くども  
かがくとくよくぬあびて道徳をほむとくハ凶邪をもあそそ



筆紙一ふ金をすよもづくんすりも一巻をかへるはもるに  
まきれといへる

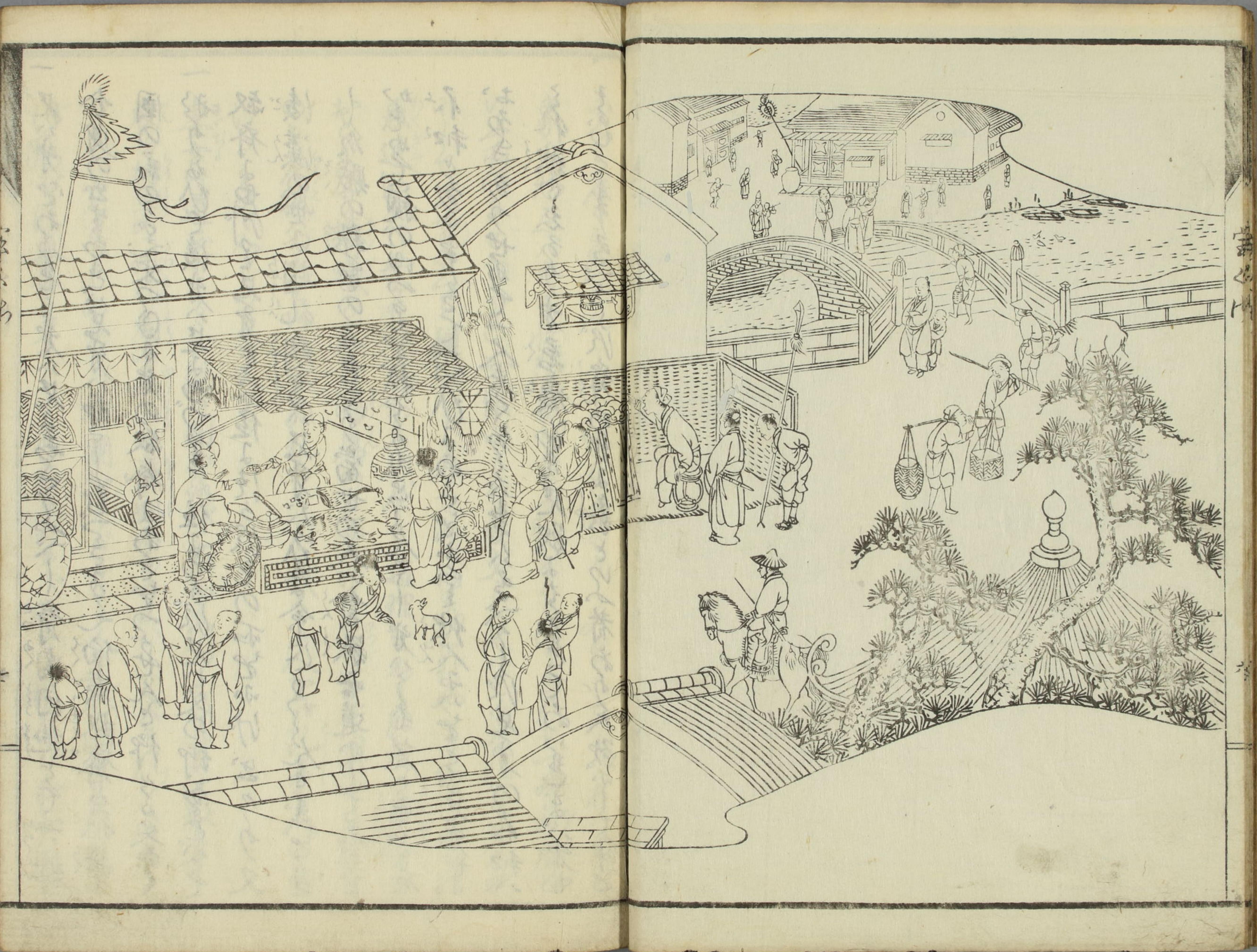
一文道より入ぞしてハ一切の廣大ある理をあるべくば井比肉の  
桂、大海をあくば夢ともし蟲の甘露のぬぢひをあくさるが  
おとく小て文盲ある者ハ方よりうづひをわこじゆのそたゞバ月日よ  
むうて水精少て火をより水をどもりゆきのゆうの事すまつぐ  
内からぐべース地ハ是かくしてあるき様ハにかくしてあるき魚、  
耳かくして空あす是れ世間目の未れやさきいもんや仏法の  
やさき小おびたくべき事よりて大智廣學の人々くらうづひを  
おこしてぬよやどきむよのがくばしてハ天のまこと事をある  
尼くらば漁翁より入ぞしてハ地のあつきりをあるべくば只小智の  
者ハ書典の種をそとハむとよ信ド疑をおこさるう才一の事  
一學問より入てよく修習をとばいうやうよ死なる者も自然に  
ちゑ何のすれ教よかねこまもみづさればやうくものとあす  
がくらる書にいそくよく学びてあるきのハ稿のごとくまか  
をばーてゑかはまくのひとー稿ハ世とのたうとかまくハ  
ちまうにおとすくすよくねあすくる人ハせとのきくとか  
ものと法人ゑかば國古ハキモチまもみづるべー燈ハよく  
くときをくらー學問よりくのまとひとをうてあきらいたまくハ  
一庵よ捕と矛とを市よ出て賣をおり捕を賣財、まく  
やめてば捕ハ行かずか矛を以てやがるをやがくまくば  
りひ又やことを賣ぬまづく不りそげ矛を以てつまやがくを  
何くるかとたてかともやがきがるるやべーとりふある人まで  
渦う矛を以てその捕をやがくばやくとひくににとらせて

うと一ぞ是を自慢お邊とりひきりあるよしんとももいつう  
とゆゑ是をばして祠のちぢもあり縁どそりうすある事を  
ゆ人ハ何役上手をひいても祠のお邊にありて坐とうまくね  
あもバいつる本をば必ずすますときのなり

一毛君へよく忠義をつこむべ一日の毛君へ大臣の義毛  
いもんや多年厚恩の毛君をばう毛君ハ私よりもたけ  
じれあると大義よりうてハ祝子兄弟よりある本をあき  
めやー伊尹が大甲をもりたて殷の世を振るべ周公旦の  
成王城をへたて周の世をかぐくつゝ程嬰杵臼我身をもて  
主君のみなし子をせよたて紀信はる祖の命にうつて家陽北  
うとみをうるまか和渢主君のうちに令をもて一人殺をあつ  
一親ふはよく孝行をほく毛べー孝行ハ百行の家なり今世に  
人ハ慈癡ある親ハ無理をほく孝行がざくとおへも若をども  
毛も道理よしに瞽瞍ハ慈癡ある親毛舜をふくなく  
あらさんとせーうどもがーもうみぞーとよく孝行をつくせー  
放大孝行の名をうそて天子とかかふ又曾子ハ親は大孝の人なり  
毛子ハ毛をき(中の孝行)ありとぞ大孝はやめぬハぬと曾子の孝の名  
ゆふが職もあらとぞ大孝はやめぬハぬと曾子の孝の名  
中からうぐ今世に中分はわる毛行ハ行はうじにね又親の  
ちひと枝をうごばうもべー大なる枝をうごんといふと毛  
かぐるを礼ありと孔子は毛へゆくと忠臣ハ孝子の門はと毛  
へ毛君は孝ある人ハ毛君ゆきのれを忠あるものと  
一親すううけも毛をもあひず又ハ毛すうふて令をもて  
毛君を大孝とひと毛を仁道をと毛君をあげて

親の名をあらむをせや一の孝行ありとばく親せばやまべて  
他人の親をうやまふをば禮<sup>おれい</sup>とりそふを覺ゆるをもて親<sup>は</sup>  
仁<sup>バ</sup>孝行<sup>の</sup>名<sup>と</sup>一<sup>テ</sup>又人目小<sup>ハ</sup>きの<sup>ミ</sup>孝行<sup>アラス</sup>にて  
人の肉<sup>よ</sup>孝行<sup>の</sup>名<sup>と</sup>一<sup>テ</sup>又人目小<sup>ハ</sup>きの<sup>ミ</sup>孝行<sup>アラス</sup>にて  
天道是を知りあひてあつまをもれあひて親<sup>よ</sup>く孝行<sup>アラス</sup>  
もる者<sup>ハ</sup>他人<sup>一</sup>もおのづく<sup>レ</sup>礼<sup>アラス</sup>川<sup>アリ</sup>の<sup>ミ</sup>親<sup>よ</sup>孝行<sup>アラス</sup>人<sup>と</sup>  
お<sup>ハ</sup>親<sup>の</sup>り<sup>ミ</sup>と<sup>セ</sup>も<sup>シ</sup>モ<sup>ク</sup>モ<sup>レ</sup>かへゆる時<sup>モ</sup>親<sup>よ</sup>う<sup>シ</sup>しゆ<sup>シ</sup>ても  
又まじ<sup>レ</sup>一<sup>テ</sup>老年<sup>アラヤン</sup>の親<sup>ある</sup>人<sup>ハ</sup>遠くゆき<sup>シ</sup>て<sup>アリ</sup>も<sup>シ</sup>す  
親死<sup>一</sup>て<sup>は</sup>三年<sup>アサカ</sup>の<sup>ミ</sup>生<sup>マツル</sup>よ親<sup>の</sup>も<sup>シ</sup>ま<sup>ス</sup>り<sup>ミ</sup>と<sup>セ</sup>どき  
あ<sup>ハ</sup>キ<sup>ア</sup>も<sup>シ</sup>我<sup>を</sup>あ<sup>ハ</sup>う<sup>シ</sup>に<sup>シ</sup>ま<sup>ハ</sup>大不孝<sup>アヒ</sup>あり<sup>一</sup>一切<sup>ハ</sup>罪<sup>アハ</sup>科<sup>アリ</sup>の内<sup>よ</sup>  
不孝<sup>アヒ</sup>すた<sup>ハ</sup>ある<sup>ハ</sup>如<sup>一</sup>三<sup>ト</sup>千<sup>ト</sup>衆<sup>の人</sup>を<sup>コ</sup>ろも<sup>シ</sup>父母<sup>を</sup>  
こう<sup>シ</sup>も<sup>シ</sup>お<sup>ハ</sup>き<sup>ト</sup>見<sup>ト</sup>す<sup>ハ</sup>も<sup>シ</sup>るに<sup>シ</sup>親<sup>アリ</sup>金<sup>アリ</sup>給<sup>フ</sup>家<sup>アリ</sup>督<sup>ス</sup>と  
や<sup>ハ</sup>親<sup>を</sup>も<sup>シ</sup>か<sup>ハ</sup>一<sup>放</sup>之<sup>アリ</sup>て<sup>レ</sup>親<sup>恩<sup>アシ</sup></sup>と<sup>セ</sup>又<sup>ハ</sup>幼<sup>アリ</sup>か<sup>ハ</sup>り<sup>シ</sup>事<sup>アリ</sup>  
毛<sup>ハ</sup>放送<sup>アリ</sup>云<sup>ハ</sup>分<sup>アリ</sup>父母<sup>の</sup>恩<sup>アシ</sup>と<sup>セ</sup>又<sup>ハ</sup>須<sup>アリ</sup>弥<sup>ム</sup>世<sup>アリ</sup>  
も<sup>一</sup>と<sup>セ</sup>一<sup>日</sup>の<sup>ミ</sup>恩<sup>アシ</sup>と<sup>セ</sup>又<sup>ハ</sup>須<sup>アリ</sup>一<sup>生</sup>の<sup>ミ</sup>恩<sup>アシ</sup>  
は<sup>シ</sup>き<sup>ア</sup>佛<sup>ハ</sup>父母<sup>の</sup>恩<sup>アシ</sup>と<sup>セ</sup>又<sup>ハ</sup>須<sup>アリ</sup>經<sup>アリ</sup>卷<sup>アリ</sup>役<sup>アリ</sup>と<sup>セ</sup>も<sup>シ</sup>く<sup>シ</sup>一  
ぐ<sup>シ</sup>こと<sup>の</sup>ご<sup>ま</sup>ま<sup>フ</sup>

一  
義<sup>アシ</sup>を<sup>ア</sup>小<sup>人</sup>ハ先<sup>アシ</sup>師<sup>アシ</sup>と<sup>セ</sup>又<sup>ハ</sup>ま<sup>ハ</sup>い<sup>シ</sup>る<sup>アリ</sup>一<sup>テ</sup>才<sup>アシ</sup>ハ<sup>セ</sup>度<sup>アリ</sup>去<sup>テ</sup>師<sup>アシ</sup>の<sup>ミ</sup>げ<sup>シ</sup>を<sup>ア</sup>  
も<sup>シ</sup>う<sup>シ</sup>だ<sup>ト</sup>奥<sup>アシ</sup>微<sup>アシ</sup>は<sup>シ</sup>り<sup>テ</sup>ハ親<sup>アリ</sup>も<sup>シ</sup>て<sup>ア</sup>び<sup>ア</sup>も<sup>ジ</sup>き<sup>通</sup>あ<sup>ハ</sup>う然<sup>アリ</sup>に  
後<sup>アシ</sup>ザ<sup>アシ</sup>も<sup>シ</sup>ひ<sup>シ</sup>る<sup>アリ</sup>附<sup>アシ</sup>ハ師<sup>アシ</sup>を<sup>ア</sup>禮<sup>アシ</sup>賤<sup>アシ</sup>一<sup>テ</sup>義<sup>アシ</sup>を<sup>ア</sup>詔<sup>アシ</sup>か<sup>ド</sup>る<sup>アリ</sup>故<sup>アシ</sup>も<sup>シ</sup>う<sup>シ</sup>入<sup>アリ</sup>  
と<sup>セ</sup>げ<sup>シ</sup>る<sup>アリ</sup>才<sup>アシ</sup>か<sup>ハ</sup>か<sup>ハ</sup>と<sup>モ</sup>師<sup>アシ</sup>の<sup>ミ</sup>本<sup>アシ</sup>學<sup>アシ</sup>も<sup>及</sup>ば<sup>シ</sup>ぬ<sup>シ</sup>を<sup>ア</sup>き<sup>シ</sup>一<sup>テ</sup>と<sup>セ</sup>之<sup>アシ</sup>を<sup>ア</sup>詔<sup>アシ</sup>る<sup>アリ</sup>  
師<sup>アシ</sup>智<sup>アシ</sup>惠<sup>アシ</sup>不<sup>足</sup>か<sup>ハ</sup>か<sup>ハ</sup>と<sup>モ</sup>師<sup>アシ</sup>の<sup>ミ</sup>本<sup>アシ</sup>學<sup>アシ</sup>も<sup>及</sup>ば<sup>シ</sup>ぬ<sup>シ</sup>を<sup>ア</sup>き<sup>シ</sup>一<sup>テ</sup>と<sup>セ</sup>之<sup>アシ</sup>を<sup>ア</sup>詔<sup>アシ</sup>る<sup>アリ</sup>  
ありた<sup>アシ</sup>バ青<sup>アシ</sup>も<sup>シ</sup>う<sup>シ</sup>て<sup>ア</sup>碧<sup>アシ</sup>も<sup>シ</sup>く水<sup>アシ</sup>水<sup>アシ</sup>う<sup>シ</sup>出<sup>テ</sup>水<sup>アシ</sup>も<sup>シ</sup>き<sup>シ</sup>う<sup>シ</sup>に<sup>ア</sup>



一足ハ才をあんと才ハ足はあくべー骨肉同胞と一  
分身の出生あるバ足牙ハあくべーむづきとて伯夷叔齊ハ狐牛  
國の君の出生あるバ足牙の叔齊もあとせつせんと作る父をく  
わりかして後牙はによやづま 位よつうばとハ父の仰あきばと  
叔齊よゆがまとす才をに位よほじとの不をふげぬうす又  
後漢の世よ趙札趙もハ足牙たがひよ余につらんと義をと  
し取賊の罪とのづをうり當世の人ハ貪欲を道小して足牙を  
かきめて親のげづを我ぞうりうりんとオハうそんともる故  
不和とある事うきてたゞひよあことかくせし人ふハをとる足牙せよ  
ああきあうせあて一人もぐあくば生ハモベーピ足牙の不和ハ  
えれ歎めゑあり才を廢め見歎ふもあきてあひまバ才も  
ももくまきるべくば舞の才よ象といふ者あり大歎やて舞を  
小生をなくして死さんと一これどもがもうくみをしてよくあつと  
象よ死こべハたよ怪び象うきあればとくにうきひてつるよ有辱と  
り不のきとかきを安樂かれて至りと見ハ毛ぐれども才大歎  
小して足をふくと親をうくみてあざをぬくもやうりうす  
魚達の老ハやぞを身わろびだー道理をあく歎者ハ禽獸も  
おどもうり蝶蟻の君臣鴻鴈の足牙のり羊ハ却ぎほづく乳を  
のミ老狹ハつをのとにせぬ礼あり不義する人をバ孔ふ人の面  
けどもあくとのこまへ

一妻女の道正一くさが然バ國を滅び家をうぐす才を殺多一  
般の紂王の妲己周の幽王の褒姒おもふべくハそれくのまよ  
つきてくるべーあまくハ皆國をもぐせー人々今めせるに象を  
ほれが近妻女多くて国をすあきバのまよに及ぞモ女肉を

もくももが役ありよくやきと賢女といひて宋公の婦人よ  
伯昭といひあるが故に敵は大半をもすとて皆もあらずに  
一人の臣下伯昭よく出立といひるが女の礼義二人は也  
ざれハ妻はあるぬ法とて出立はばつるよやけにまひそりこのが  
貞女ハ両夫すまみえどと入江よ弟をあげむやくかう高野と  
りの女ハ裏をさぎとつねニ丈よ嫁くるましり令女ハニツの耳を  
切李氏ハ臂をたち盧氏ハ同をくぢりとありかうせ  
實女ハ名もまく末代のが形り仏も支奴のふくして敷絨をまわ  
祝よくほうするを巴を家のがまつとわらひてあり智れ  
丈のまぎりひちくあまくあまく丈の行きをばかくしゆきをばかく  
バ六祝をよく和合せし先いやしき支坐しめすくほひおと  
きしておもくともるく家のさうえおとほへあらの若歎よよるね  
ありと書きにいとく己よすのじる人の娘を妻とせうじのじ  
その箇もとせんよさーをまんで舅と丈をうわーや娘によ奢  
きやえ家のやがとももあわすきて必ううづるきのと悪多喜あ  
なれど支坐もひよあす年多くつてよ丈の悪多喜をうす  
人やもつれくせせ我も早とてか一もおそく新なく家  
内をみぐもものと貪しくあとへ丈婦の口傷キミえぬや惡多  
うきひおやし丈婦ハ一圓よ着物あきバ祝のむだつきへ  
一女の性ハ皆むぐとくわく人我の相もとまづうの事もあらずて  
貌色あくあり食慾あれどくしく私を忘れ我身を  
毫してへへ邪見ありいつくまくして視をまくふくは  
きの事もとへばそび椒ハ思ひあきと思へば消まきま  
候でもうござりあにひがいたたうり、まことにまハ男のちゑり

はまゆうやうやそあうのくよえもうまゆうまゆおほーねのうをと  
あらば又がーのまゆのくよえもうまゆのくよえとひてつみのかぐ  
まゆとしむつひのまゆをぬ換多く堪べきまゆふなことと  
よへるびきまゆわ我慢をもこー經氣あ麻疹ふとれあれ  
うんぐかきのく女の性ハかく擇きものあるども史ののー  
うきハ女めかくとくとゆるそ支の位あるルモバ女も位あるく  
きのあり松たうけ毛バ糞毛毛多約とすづむがまとー  
一女ハあまくらか種毛てのやの若魚とえべー人ハ良友よ  
方の若魚をこしてあるべー魚友とえて人ありとむすり  
仰んは狀て史魚ねをな不ぞる人ハ魚发病をねて療  
治ときらふがごとー又わしきをえていがうハ禪の友と  
毛べくば叔友と求めんとぬで我よりもぐとすりとあふ  
人をよく見てつひよあーとほドのべー歎よ柳くら人を  
友とまゆまゆハ意あきゆうそ我ハ毛とすり擇き毛とづるま  
人よあーとほドハ意身からむべくば次や我よりとる友あぶ  
ちゑくをざるべーなまく小ハ毛とすり毛とひくのいふーの  
人友とほドのにふ信とにくして朋友小ハ命をもとまぬ  
ほどの仁義あり今世の人ハ面のほドのすむ毛とひくを  
ほことの友にあらばして多くハあととめまゆのうむ  
道を行ハ馬の力せつまゆもあととめまゆのうむとあら  
あしのくのをねてつひべくまゆとほドハ毛後よゆるとまゆ  
うくまゆのうくまゆ

一隣ハ貧家かてもあととめまゆとほドハ被毛のく車にて毛隣が毛



むべへきものひよ徳用多きわくまきあゆ水ハ迎ミ火ヒ消メ  
那遠列の駕顎ハモモ議小ハおとよりおほーものもどめ和  
食あることかハモくあきらのそ一切の仰き事ハ必モ隣より御物  
あるべーちのくしてたがひに那をあるやゑそしるもあゆり  
兩虎ニ貌ハづきもあくそひがすを一

一家ハ金數よあく壁立敷毛もくびとばり衣被ハ綴よあくぞとを  
ひのてうかきバよく食あハ珍撰よあくびとを毛とドのくとれハ  
よく妻ハつやに色あくじとが一紀とすとを一一周礼は曰  
ひん貧ふてもんまよなきバつゆにまみつゝとすてめんかすて親子  
兄弟支ぬの六祝不和されば歎よう毛ひ多くてふくましき者  
一老也もくあき人の時よあひてある候よのぼり又小齋が人のうよ  
あくとる事をもうりくはざつるひいづきもまごひの毛とねあり  
あくとて老もくあき大半へそりとすまうもとく年半をくとく  
一日ごと日をつひや一教もぬハ命もぬり老へぞーと老人とある  
を一そく財ハ貧の水底りと泥よりきつゝごとく老若をうけて生  
久もあきやうにゆきのと

一年考とば他人あわとむうや浦ひひくるはくとまに徳人を人をみてハ  
いやとよひかくいがく絶よきもきのそ誰も老ぬ毛バ浦まし教ももを  
うるうするめむくある毛のあれば人のととみて必矣カタクシ毛  
一良業ハよ若々毛ども病よ身ひて利あり患毛耳よさうのりあした  
身の行ひよ健あり人の徳毛とばむとあてせびーと毛をりかわどかと  
はぐる毛の毛毛、下毛の今人の徳とよく見ておおとから毛をがこき  
人毛、一秋毛も不義ある半毛、一徳毛をかてこむべー教よ徳字  
かれバとの家聲毛とといふと恐ていたゞるハ深の道よあくび

一 欲セバほしにまくじよくをきうんよもとバ必モアヤ候  
りきそまのトモバキ、むる半カモたのトモ核て必モテシ  
おどろきの欲ハモドリヨリおこういナリハ勝ムヨリおこアワギ  
シハ貧家よりおこう大罪ハ小家よりおこう一切の罪科ハ  
不仁より發るナリ

一 男子小ハ禮節をきく度々女ふかモトモ持テ予を以  
志モ多考ハセ書のモトモトモ近ヘ幼少より養シテ  
クシ継アムハセ叔把減をリムアムハモトモ幸モけレキ  
時ハ家女をモのモにて何とアラキヤ左様の時ハ礼節少てハ見  
着敷ふがいゆにね見えね縫リ達者アムバ何様の被を  
換シム而もまことやうに縫リテヒ義理又オニ幼うちによく  
モシマロと勤とモベテ成長してハモトモ守ラぬきあり  
タミテバ本のまぐさムジアトクホシハモトモダラガヒト子を  
あれまバ枝をアム子をふくわもハ食よ向テ  
一 父者ハガトモある時ハモチモチ貧わ者をモヒガモ養育  
つきゆヒガモ養育者をモヒガモ位ひアヌモバ像ニ  
モクシモシヤムシの

一 カーのおとも重所モテヨミテ用のほづりぬ核モトメ又  
家ムシムシモマヌケトバ人ノ用あもに立一人の少分につ身  
失カモの家思ふ通りをモスンとアムモニ立ウムビ  
一 言少ても理はあくゞぎる御ハリキ半カモモチ智の老のりふ  
半ハ理はあくゞぎる由互義をヤズル半カモモチのニ皓の  
いとく復モヒト人をヤズルにいとむ半刀モセガモトモ一  
半モモヒシムダモ半カモ御の多き人をバカモテジ大の

向まうほゆるハ魚トキシテボト一若竹ハ一毛小ても大切  
守るべ右の賢人ノ人の毛と財をバおもてば一とよき後を  
おもねたりとくえきもすまむをうけくま人喜樂よりも海  
實ゆきらへくもぢやか道理をりよきとづきと人のあが  
ううみえて我男のとハ誰をもづうみといふかのと一  
はきき人も我身小もわききとゆ一きをもあくねこ人せりふ  
ふを以て我男をせん我男よむねきとゆを以て人せんべ  
一智君は多くぬドソリぬきバ主徳をもづくもがくゆ人  
あかどるキホー慈友とぬどる者セバ人おもとせりて  
いもとのこそとバ虎の先へきて行犠を一切のききのゆそ  
そぐおどり行おもとへくもれだらうの先へ行ゆ  
一雲よちうづくゆのハ事くあり賢よちうづく共ハぬくにあり才  
ゆる者よちうづく多ハちゑをゆ一かくす成者よちうづく多ハ  
人とお智者よちうづけバ歎よ成者人よと付バ功德をぬゑよ  
と付ハくく取リ僕人よちうづく多バたつてふおくる故に  
無縁をばいとひだ一

一書ハ山のとく園よあきごと縁ある者ハ多く幸れ一然ハ  
何やどつと重うりた何方へ行ゆる身にあしがハじめよつも  
ちゑ何處へもよくあきびらきのと賢人ハちゑを貴び材を  
いとく漢書よいたく金ハ山ほどねくあらとく肌くる時ハ之れを  
まき付よらることおきぬきのと茶穀と豆役ハ漆の木の室  
一粒をくふ付も農夫の年中のうつとをくべー一縷である  
時も纏女の幸免を感む一耕作する者かくハ食をゆる

第一世人の人はまづひに恩をとりゆタハ皆人をもくのまことに  
しておまづひにひまもくるやゑ重ひよ恩れ底生えまづ家  
職をオ一につとむる人々の恩を報ずる  
一國政ハ耕作をすと義を守る人ハ孝行をすと父母死  
てハかかむもとすと軍に出てハ勇をすと一家残をもんと  
あふハ書を讀せばとしはがひとしくりハ仰よあわせばと  
ちてある年の事すがとつとめだりて未を終ひハ意のゆき  
一篇も成人の小うにくもハあゆのまきとおまとバ根のゆき  
本の技巻をくあきハ大風すもまけざるがとく小うの人れ  
たまにくじハあやのまきとまいたとバ根のあまく入るホ乃  
累もげとくハがーの風ふもぬとぞぐかー

一世用の事にと不<sup>レ</sup>及とハ達人の多くよるまゆと居宅よく造りて  
家財ハもくれく衣類ハよくしてかハのとく先祖の祀<sup>え</sup>をバ囲<sup>い</sup>して  
み供の寝<sup>ね</sup>にハねを入網<sup>あ</sup>夕の食<sup>く</sup>は奢<sup>う</sup>そんを乞<sup>う</sup>せざる  
きのゆりた色と不<sup>レ</sup>及のゆきやうにまをつとめとぞく<sup>レ</sup>とぞく  
一書よもく人のわざのうそんざとぞすとくもべく<sup>レ</sup>とく  
そくもせばくおざあひとくもだー僅<sup>く</sup>ハ恩あつり恩を  
更<sup>う</sup>きの恩をやづハ世<sup>の</sup>麻<sup>の</sup>のあとそんざとくわく放送成  
者ハ玉<sup>の</sup>わざと大切かし人のつわざをもとくもまもと  
あまび又とめのやうにて又人よが一或ハねとく<sup>レ</sup>又生も  
さくとくおまづバモ<sup>の</sup>わよせんとぞひきとくわき<sup>の</sup>ばの便<sup>の</sup>お  
せそく又ハ<sup>の</sup>肉うーかひてえをぬやうもまもとくもとくもとく  
のあくと人をやももうじ<sup>の</sup>まきと心よきのをのまのと江錄<sup>の</sup>  
の一人ハ書藉をかくても大切よえておもよく被<sup>う</sup>へく

之せりゆゑ誰人だれにんもぞもがたりとおもひ

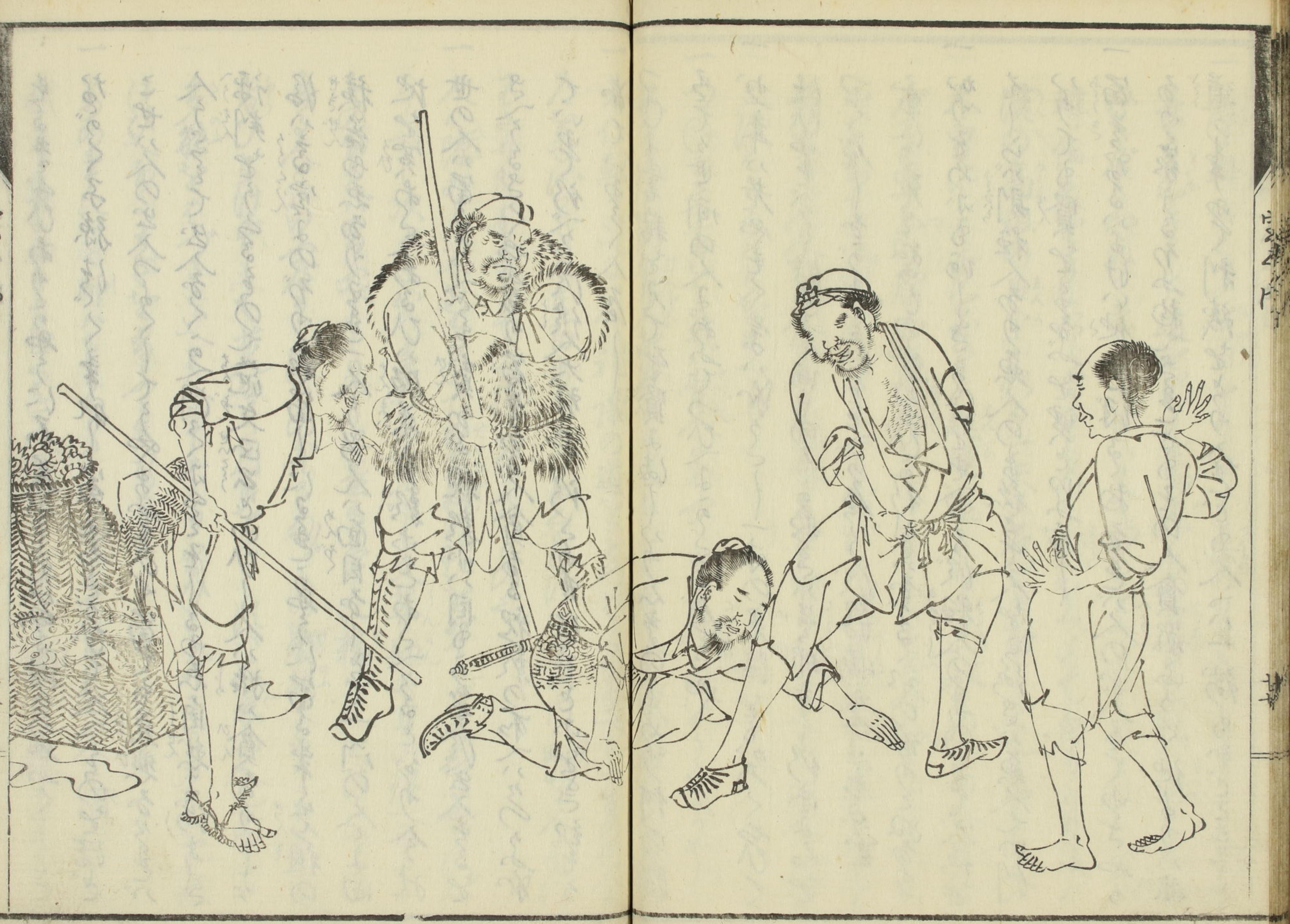
一人の恩をもる所よりの報せやすりあれ思とばをもよとを  
もつるふ事もさゞへ思せしめの者思せむとぞとも報  
ゆんとせりかをくわき時へりすて差さきれを思せむだけも  
きのれとすもくに様くやうきのとせれとせ六法の義を  
えぐくび人へ思せりのとせりあまべ

一 唐の韓信といふ智勇をひきむる兵ありまへもくして大に之  
勢を力せきて道を引て馬廻りの出合ひに至ハぬを太刀  
ぬく度をやねく事あらずとハシグアセテテソリメトリ  
韓信是をよまたゞもとて脇をぐらすをすりと後ハ  
漢の高祖の臣下となりて一天の名をあびしとくよりの入ハ  
大勇にて勇をかゝへ進退途はある。今世の人をむ  
度き事かあひぞれ退くべき事かハモミ和モドキカ  
ハモジてもがだき事かもぢば天地重流のちびえたりを  
おひまん人を人のまことぐる事をよくとく一方の肩  
こほをうふことをモゾー

一つの文書をよみバ聖人よあひて直に指南をうるべか  
又きくの賢人を友ともることあらず故人のいぐれハ  
つゆ書藉をひて聖賢よほどのうなきのへりや何の際  
きてう世間の人よあひてつひへよづくる度をや

一 シ年ハ老やもく事ハかくして一寸の光陰をもかろくやひて  
はひやもべくじゆしゆとのものを引きハ是難かにあふんを  
つくばへきづきこれとへりゆくにゆく悔失よまゆれ  
おにきれぬひのやちびのれきハかく水のゆりこぬあり  
一からそあふもかへきまのをもべくじゆ狂人のまのとて大過を  
もーらバ則狂人あり愚人のまのとて人をうめきバ愚人とい川  
ソリても賢をもあふを賢とりよがー

一 篠ちなるはよけい他へこぼすねあもバ人の出入きてあまやう  
あやの家うちわふねくさきどもその人貪欲ふくく他よりハ詫  
道のまゆを利残をとり入金ども人ハ一物もやどこうじと



もるをもづひあり、ゆうに不義<sup>アシ</sup>て爲る時、あやふくと  
なぐく子孫は、く幸<sup>ハ</sup>い家よあくひて人へものをほど  
こせば人の出入つよくて、うやまきのを爲ても、慈悲<sup>ト</sup>ひ  
人うごみて出入あく、うりと小<sup>ト</sup>きそしるゆゑ自然よ説あり  
説判<sup>ハ</sup>するものと范文正公といひ一人ハ娘ハ貧あり、一<sup>ゲ</sup>  
母ハ高官<sup>ハ</sup>のがく家面しに、ゆゑに、ゆうに爲る事先祖の  
積善<sup>セキザン</sup>もあり、と一人うもんハ面目<sup>マツメイ</sup>そ一門の人々<sup>ハ</sup>田  
地を實<sup>ハ</sup>あるひ、版<sup>ハ</sup>税<sup>タク</sup>を貢<sup>ハ</sup>ある親類<sup>ハ</sup>同<sup>ハ</sup>のめだ出入りを  
世の人ハ富<sup>ハ</sup>と、いどきを貪<sup>ハ</sup>ある人貪<sup>ハ</sup>ある親類<sup>ハ</sup>同<sup>ハ</sup>のめだ出入りを  
きくうるをくやさうり富<sup>ハ</sup>ある人貪<sup>ハ</sup>ある人貪<sup>ハ</sup>ある親類<sup>ハ</sup>同<sup>ハ</sup>のめだ  
出<sup>ハ</sup>い、先<sup>ハ</sup>後<sup>ハ</sup>従<sup>ハ</sup>大勢<sup>ハ</sup>も行<sup>ハ</sup>うを皆<sup>ハ</sup>と小<sup>ト</sup>ききをう  
かて、いわく入<sup>ハ</sup>じ。

一  
朱仁軌<sup>ハ</sup>がいへる「人ハ礼儀<sup>ハ</sup>の道をもつむよせ<sup>ハ</sup>」一生の内<sup>ハ</sup>  
名をもつて、すら百歩までハおくをば一生の内<sup>ハ</sup>勝<sup>ハ</sup>る  
もすすむままでの換<sup>ハ</sup>あきこむ

一人ハ隙<sup>ハ</sup>あく書<sup>ハ</sup>をもとて、聖教<sup>ハ</sup>の程をづ<sup>ハ</sup>ざむあるやうに、  
うくべて次よよかく手をもよ<sup>ハ</sup>べ、又算助<sup>ハ</sup>の方の程<sup>ハ</sup>よ<sup>ハ</sup>る  
きのあき<sup>ハ</sup>がるよ<sup>ハ</sup>べ、ゆうに善<sup>ハ</sup>い事に積<sup>ハ</sup>出人<sup>ハ</sup>を、<sup>ハ</sup>りづくに  
色<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>りの産<sup>ハ</sup>う<sup>ハ</sup>どそのが<sup>ハ</sup>あぐの<sup>ハ</sup>義<sup>ハ</sup>然<sup>ハ</sup>へぬうすも  
お<sup>ハ</sup>りひとけ<sup>ハ</sup>ぞ<sup>ハ</sup>てせんかく月日をくらは、大<sup>ハ</sup>の人に馬<sup>ハ</sup>  
多<sup>ハ</sup>能<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>りと<sup>ハ</sup>て、入<sup>ハ</sup>すをうやうひも<sup>ハ</sup>か<sup>ハ</sup>きよお<sup>ハ</sup>せね  
ほひ<sup>ハ</sup>あるよ<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>るゆう<sup>ハ</sup>な<sup>ハ</sup>く

一  
萬の年に一<sup>ハ</sup>而<sup>ハ</sup>もとあざ<sup>ハ</sup>ー、あくがる事<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>父<sup>ハ</sup>同<sup>ハ</sup>べー  
秋より年もおとす<sup>ハ</sup>きよと<sup>ハ</sup>人あすとも道を同<sup>ハ</sup>れよすき

あらばもううへはじてうきよひぢべー年れを後少ハ  
よもぐううだ我ハ道を師とぞべー師はあはざきハもぐうのまゝに  
てもあどひとけぬきのとすれ勤掌まつて一時の掌通もどきとぞ  
一お毎人とあゝとぞもヨグリハまけて人よあらひひるがよー象  
牙を達せんとおひ先人をきせしりよと人をうるやあらひも  
身をうやまく人の親をうやまくハ多親とうやあらひ人を  
うのゆくもる人又ヨモトガリもる人をかうむくに  
一万の竹をびふを務負あるかぐさとこのも人ハ己のもとと與  
せんまもと恭双六もまけてハ無念よもとのとヨグ務て人よ  
ほいあくふハせそヨグ人をあぐさんとせるま徳よもむけよ  
きくときぬとあらふその友れふをとうりゆきむきて己が務  
事のあまくもと與ともる事是又礼よあらひ賄ハ與もうおこ  
まくあづき財をむちよきづり多一是皆務負のあづきを  
おのも失く人よ務人とおひ道をまあびて務べー掌文をしてハ  
人をあやにれて友佐をめもとて穢をめ辭して仁義の道に  
入ハ掌文のかへ是人よのゆづをして人よもぐくハ務不強か  
一万にうき人の人をもあて居無をあらんとあらハまくよあくる  
だくうじきとバあよ松き人の恭すまうたうにうーこうじが  
恭の居く世人をみて己がちゑる及ばどかひ万事をあれども  
幸大いあるあやまちく熱して人の生きつきよかまくとやくね  
よもぐくものと又るひーる手ハ功も出るハぬ事小ハいゆす  
家用の者もつづる事多くをのこ恭ハトキゆかもよねぎハ  
ちゆうにモグキ事ゆう文字の法師晴龍の襟脚たがひよ  
はのうそヨグ智よ及ばじとやくす何ともあらもぐうび人を



か爲へりてわからず本と云う智のうろき又家道もあらず  
あるハ姫事をバ人とあらずとぞ

一 そ人の子れども、のちうるハときう父の弟也人とねりよどそ  
史書の文を引くべしハきのしくハスえーうどめむうぬ小ハ  
おとおと見ええと想へて筆者の弟也文書を記させ今  
弟也くおとぞ多きハ歴かくときのあり

一 藝ハ身をももるとハいども多くハ身をやづるも之を藝  
あるものハ身に傍かくしてほんとがよ人ふみかくもれ  
一生何事ねく財をおもむ一藝をもひハ人よ藝もそなれ  
又藝や無事をもるすもがもくあすまは人も一藝  
是人必ず浪人するものありまとへばよくわよぐ老ハおぞき  
よくおぞきハおつるがゆくエがあるほどに必ずんとほくべ  
一心ハ後のがと十文書を掌がハレ一ぐじごとへんをあきらめに  
せんとおと隨う學問へてとぐががんやうて所へこに道を  
開てゆふべ死をとむよとあひてもむび根をやかへぞ  
枝葉茂盛源をふごさきばかりの毛清根と源ふのれ  
玉ぐんをぐわきバその德親義又ハ他人へあざれて世人を  
なとくもるものあり

一 玉ぐもく食事必脾胃をやがり病を生し命をほ  
むるものと云ぐもくもくとてまとももしも和とつきあを  
そこの事おやしもく半に必まをほくだ  
一 おまもがむれよおづきうやうぐうよおづきうとんの内  
さくまくぬ用ハ少ぬ方がよきよかのとさもあくもがむれよ  
かくもくうきハめざるがよきよおづきうとんの内一途不義

つうぬは、さへやぬ方が能くの方半、ゆうよお俄うるまを  
てふの内ぞ、あるぬめ、とある方が能くわらひと  
一人の命三よ界のたゞすもあらむといへ何すある乞食ゆくを  
食を乞ふうるをのべく、一乞  
あやまち人いハ妻まごの二割にあく、食くと食くと  
まやくやうをとば人死死もすとせせとふくまばねさんや命めいの怪けいと  
見みにまやくもべー、おかく人ひと、ひづのひづのとまきと身み城じゆ  
うそうそ一一かくがのみのみのうそうそとある命めいのまゝのまゝとまきとれく  
あ車くるま一一他のほかの財ざいをむきむきがる小こ人ひとも妻まご夫め  
まやく、まざまハ死死をねねとがるやああ死死をねねとがるを  
死死のちとれをあらぬやゑなす

一命をも奉るゝよりもゆきとく大切よもべし  
礼の事あよ引をくすりめ義のたわに命をもつる事ハ精毛  
すあり。うくもべしと仁者のかみあり  
一世の中には必ずも死ぬれり或ひ人の身よも死ぬ  
間かどもあらまもあらんのよくあすてくすりせ又父もとひ  
死ぬがまうとくとみのとあすてくとくとく人ハ世するの人れ  
多くはあらぬとおくゆづくみやるきのあを

一  
まもへれ礼を内へ又都より禮をものへ重きにむかつて見  
か事あるが、巴重くへれかくるとおべー又人より我へ某種を  
アキラムをもとづかすあり、某種あると被<sup>カ</sup>うんざり<sup>ハ</sup>人あり云  
某種の内は道理こりありて、又某種あると某種と  
之バともいひくるやれ又一概<sup>うちがい</sup>よ某種の事あると、バの如  
きもなまきものとその様ともやく笑<sup>ハ</sup>まゆてほく唇<sup>クフ</sup>を半<sup>ハ</sup>あき  
よくまくるとが、こき人とひそはくはくもハ猪<sup>クツ</sup>のた種あると、バ取<sup>ハ</sup>

六ツの道理をむづハに道理あづバとある事もあらず  
すまゝもハ生けしるにあとある事もあらず  
生ト寃もとあつて是がひ多トといへるがごとく  
忌かざして勝と云申り又忌か者は貪欲もハ止むに  
忌かざして又忌があるものとあらバと云ハヨモト礼をあり  
くせ度ト是がくさ齊ハ鉢をつとひ世話のめ  
一ト人かどのあやまちも度無かひましもへうて度無事ある  
人ハ云のゲー聞のゲーあきやゑよく川くおごとやづき  
多ト死ぬをのくもるキハ一くニづきまにあひぐとくも  
ともせざる半面をばかんかん走きゆくも氣よねつむる  
きのハ千人の内を稀ある度トヨグロミトよくぬハヨグ  
半面をあくとあも半面ナリ才智教はるきのなくハヨグ  
凡俗うそまふくさんやね又よく勤むるト人なくを  
そもくよ思をほどこそべーその人付かきゆハ必ず志高懶  
きのこ熱くく嘗をバあ列くー罪をバゆるくも度トよ  
いこむ所ヨモー

一利口を以てト忌のきのせつをむハ天程よそもタラク無きより  
つが身よかのく法天の思寃をぬきぐれ多き事もひおこ  
そそほの小ハ多角をうづる事の日月ハあまくうなまじごも  
はがくもる穴の中をバモト一猪ノギ又様魚の水をもももぞ  
う事をうしきつてのふごとをもみく天をよかす事を  
ゆだしすよぬーとごもゆ一物の内を月をもやん乃  
あれを先をうけろふ

一及ざるまづかはせう身の分限ぶんげんをあくともやくとあるべー金銀も  
らをあくべーてほえバ貧苦ひんくをうけかも及ばぬ事に精を入せバ  
まづて病とある命をあくもあひてもあむハ己おのれがあやまつ  
一切の事ことによくうんべーてゆまときとあく事ハふくとあまう  
か一の事ことをあくがむハまづう列はりのむくとバ翁風おきうふうは沖中おきなか  
さきなづる私わたくしのつつへきめぐきゆうにほハまくもす  
拘くわりをよみがめり

一馬すりあらそがくとねす又ハ死せーきの教くわくすゝるのか  
すまき半人の力及べくべだきをほうへでれどのうで  
叶かなハぬものと馬をもつゝもよつまくとよく見又馬具よ  
あゆまくふるうとスムのモー賢人せんじんハあゆまくまをまつ  
といへ道橋ぢばしゆくもあゆのまくとつぶたるべーあゆのまくと  
あゆまくぬハ意いのアラフなり

一或人のそく虚きよ僻へる所よことをバあかてめうるタナクと又  
またにやるうともえきのこうとやくもそきとばうくと  
をー又賢者の事ことにても義ぎよそもけるをバ角かくるやうされ  
君きみ者の事ことがても理りよあくるをバ角かくるべー義ぎによく  
人ひとよあるべくとハあきなう

一人よあひまゐる所よの人は用もち事ことを業おとこして先さきよつひ様よう  
つひへやわ行ゆきをもべーほよ用もちをいりんときもバあひハ乞うき  
あひハ又よの人來くわてひかくきくよりもそもそ  
一章あんもとさき人ひとハ陽氣ようきさんをあと先さきの心こころ樂うれいさみやう  
およ功ごうをくとて一切の事ことがあきにちう一夏いちかのおれ大おほ乃  
ああ也よ飛とぶがとーことに若年わかねやく祝のぶひとー人

多くは男とそぞろ歩きのなり先程を三方なくしてまが  
ゆきとゆすり又人より事半をもてめいたをうるまく多きにいぢ  
ぞともあらはすり揃もるすり多くておき人失見云ても熟すへ  
うもよやもくして見えぬものには、ふるまつたといへどもかま  
くふうひ取りももときの人の弱弱も失見ふとくもかま  
りて花舞くばれいをねぎほひへやすり女子まことに金髪こねつひゆみく  
おへどもふある人乞げももておぐくくせんじふごにのづくく  
あざききのゆうにてわざわざあやまちあきまきと

一方のとがはにあすむるも人のうふきのすりせらばく  
人の耳ういのじよつこと思ひ人の眼まなこハ天あめよそとぬくとぬをあぐ  
らをべて誰だもあらぬドとやまきをうあるものごくらも人ひともす  
そをのそ天あめよはやし人ひとをゆといへりしもとも是ことわべーとあま  
をすてはまどんあくどども諸天しもくあめのかねりんばちりのうきりこ  
熱ぬる一と魚うおまかはにかをちづると云うりそ天あめふも祕地ひぢやのもぢ  
相あいきやももぢ象ぞうふやもなをもがだー不義ふぎあるいぎーおうす  
かばよくじは氣きを和なー又うー鷦しづくとときんとおがば行ゆく末すえの運うん  
あくうまーと又左さひぬぐま人ひとのとまきも魚うおめりひ人ひとを  
かくせて椒しおまうとまそまぐりひとまきまど人のひくやうに  
ほぐるやうもまきのとふもわつ世よの半はんとんをくもるがんせえ  
一年月つきの内うちふくまぐくのまきまもるのと椒しおまのまをくまく  
ゑまくとまくく紫むらさきドくろとくとくをまかくば時ときとのぞくに  
いそぐべーのぞーとをぬはままかはぬぬとぎよさもう出来できる  
きのこ又す若わかよ尺しゃく魔まとくすすあきとばきりハ木きへのぞーとハ  
必邪魔ひやま入いらみまつあがくたまのと又天あめよりあくわる縁えんを

のぞしてあがうにとくんとをもバ福ハナリとひとハミギンヒよ  
ルと云ふ又ハモニキ必他ノヨリのとささんをる財人を  
御一おもと時ハ人よ制せしもといふうごと一 次よあすま、公  
ミムラバ何ほどもんをも川先無むきのどくみーく  
のを底度しもとのとものぞーぬきバそのいよりはあらく  
ありふ繫も義つときがきかく游るこ又人すすき種わゆテ云  
うくるともがまハジのぞーぬきバその者も退屈ーその内  
人も理をとくものとねーねーおもにらうのわづぬ  
淳世そらをくらしやモのぞーぬ時ハ自殺とたもひくらのと  
一くのまにせんとおへたうりそやづきよちききあり

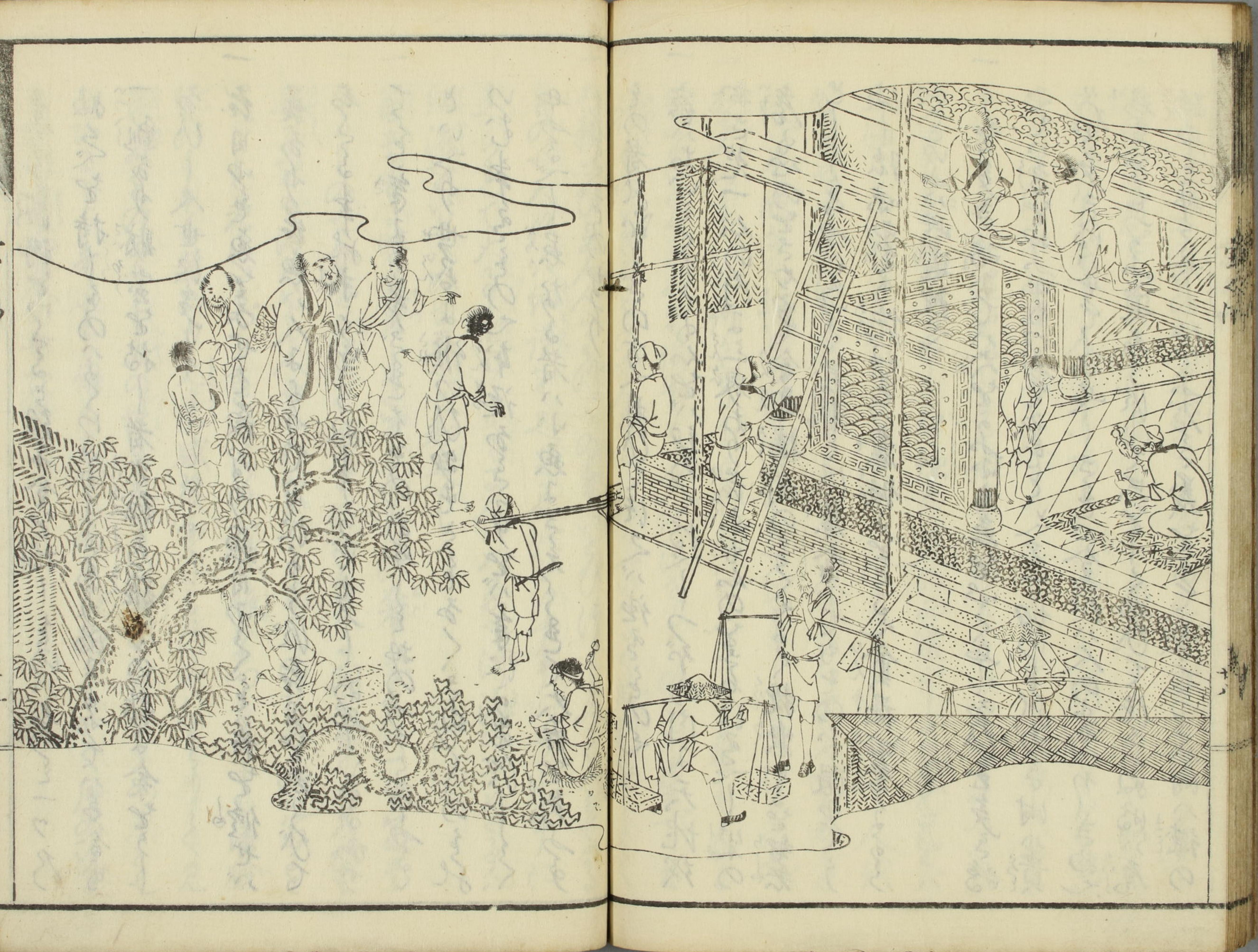
一 貪成者ヨモヨモとよくぞてその者ヤドのら限よあらんと  
那由也五万の事不思よやそれてつひようもひよくも  
あすり下にくらぐる時ハよけいきゲボとくわく一切のアタフ  
ざる事あくも多のとれもと是よく人の頼ひととくある  
ゆゑとヨガウをもとばつゝは氣とやもく一人をもむづるも  
もくかきよくねの程をもとば然天ともくみど身のつと  
あきとあきバも位せのぞまだ穢とも辞もととあきま  
智のあきやも

一 箱用キラビトて分にあらむ役を勤る時ハ母よくやるアキ  
ヨモのと又箱のはつひをもハジキバもくしとあらむと  
威勢あるはつゝよざとバ失ある間よくあらむ一切のアキハ  
がきハ用の時くわくと醉て放塙をもとばさあくらゐなり  
達者かぬまくまよざとばやる時よくあるとされバ智もハ  
末のうんが一ぬときあゑうみて悔のあきやうに用んちるこ

おろうか老ハ未のがんがへづーもあきめゑすく海よくあるる事  
一人のあさきをこそはまきもゆうきうと都司と、のりそりへ  
ださばな不毛で人の手へ向へる事叶あり、税利のまがりが  
あふさびして豪強を以て人をもとげへんともるがハ中へき  
うふもじて豪強を以てこそあるあつまうひをうそそつあバ  
いふてあればうかし智徳ある人の正道にしてぞとぞバ  
人ぬことに恵みく礼あり大恩の人れらむくと奢う人残  
かまうてうやぬをもんともる小ハ法人のうちもハ財よあ  
グバ是れをくれを先どもん小ハ禮へをきへをきむも之  
一聖人の書にお説うある下女下薦をうるよ一藝も衆よ  
せうどんのまごもものと人あまくつふ小ハよく因利をし  
その者れがよきの方へ用ひてほくバ徳をものと

一家ハち、さくしてわんをばむくねべつやの内よ天地哉  
おきを一の内よ三界あり若年も人のまことにそべり榮の  
虧も心のをさりやせ金剛搖歎のどくくよく歡樂ももを智慧  
とくうもすむとくく多福とくに兼食ふてもそのう限少う  
ぬく殊味やも飽ぬとば兼飯ふとくる貪欲而第よより  
ぞといひハ此道理之

一うを多き福よてハたせうふも急をくやかしむ多き福  
少てハ多きを極ふるものづかてゆもと、くモ一切のとがき財ハ貴  
能など多きぬはもくもづかて、もととば金銀ハ人の身一りきわ  
能などもづか道あらびて只をくらひてはうハぬぬハ夙  
穢れとゆきもづけよがま義をこそ觀てつふ財ハ財の



まうちの河をりるど紀年金をおしものハもづく一つ乃  
ぬ乞を持くものハ多くりありとありぬよりてハ年金も  
一瓢あり財宝をおし者大絶え難万の難よ命をう  
あひ一人せに多一

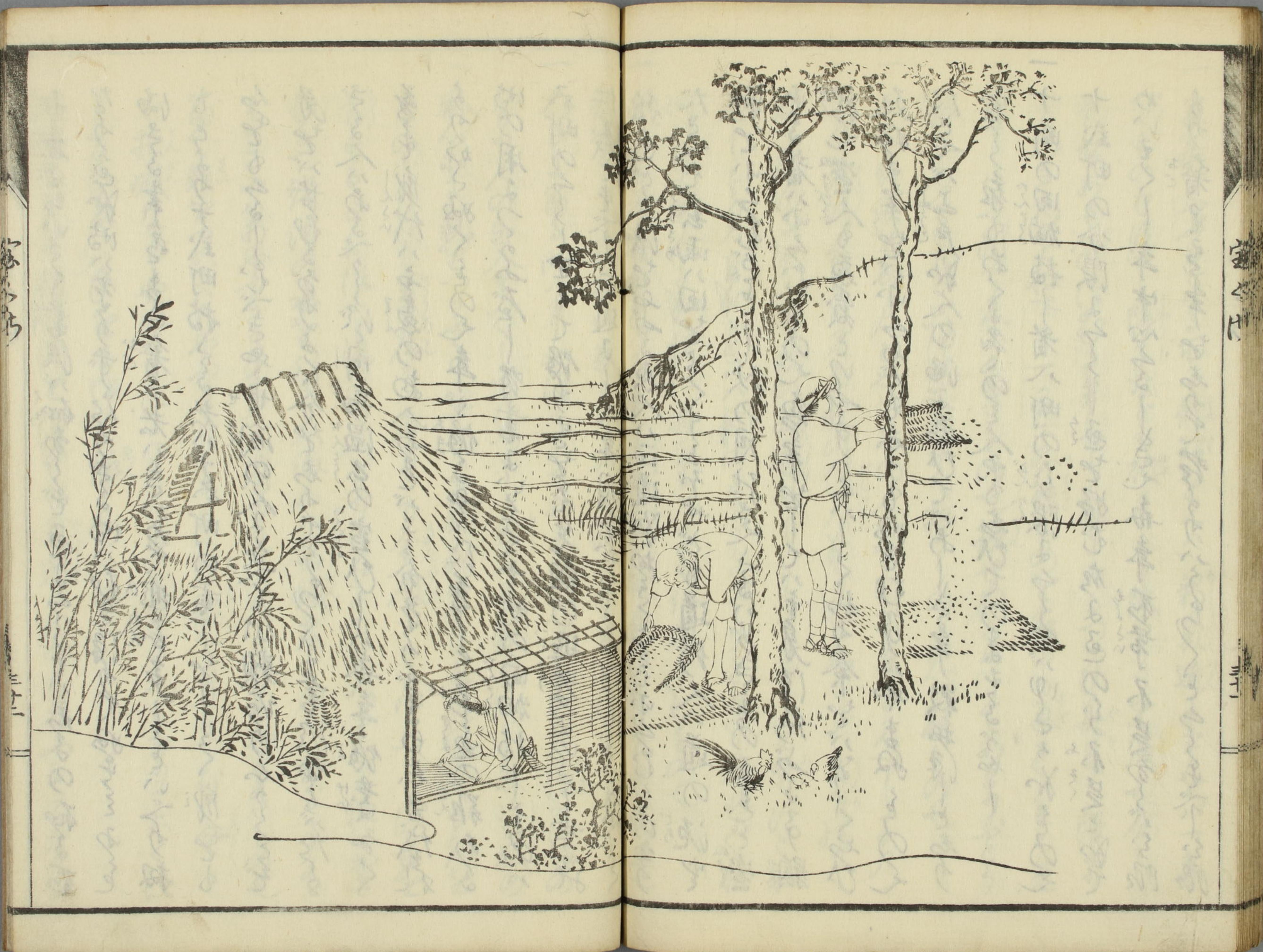
一古日少き魚をかせを魚なり魚日多くを若を修せバ  
若あり若魚ハ人よりて日によりて古日とあびて  
あくる半代未とわらぬ事すのぞ多一あゆきよりす  
とこときよのあざきをそのあゆとゆづくやす  
といす世もよ誰のひ知もとくとあくきぬぐのれ  
のも半身もとくを況あくとせばまにのあだ  
やづるべ一魚なる者ハ小魚よとくとて大魚を失はず  
多きとくのみあり

一大預りひとん人ハ馬がうの半いとひはくとくハとく  
きのと大内ハ細達をつゝましにとり事事あり小半に  
まらきてたりとちとくとる人ハ大魚の河海のうきよハ  
細達をとへぬゑゑことかず一

一家もある財よ貧しきとまをとば奢うきとば一生家業  
あるものと分を高めてとむと好む也ゑよ間もあくやうびと  
妻ふとめあどハ一人やもあどくとくのなみ旅ハ萬と  
へども老くまづとき者あり或ハ旅茅とくとて後廢  
跡のうきよ者あり元來感勢あくとくのふはせとくとく見  
みゆべトキゆきと誰も見えよとくとばやがそかく月のひ  
よりのれや人のせ

一家居もやがまこゝる所よ候。種をふへ新敷造る事をバ一年  
ごものぞほべ隣ナカトなども被きる紙をうりを張之をし  
毛智ある人のほもる事あり家はあるつひ具足を限らず  
のれきわとねび一ふニ承認ものを家やも色そもと免  
キーハツリてえふくきものを換せぬあとをあまり、さきう  
れもんすし只はひもあくおうのよひが能もの  
一人の居處をあらんとふびその人れこのも友と見えばす乃  
よく孝行あると見え親の仁チンドウあひをあらべ一臣下シムサによく  
志へ志むるを見え君の政道セイドウ云々くして臣下シムサに知  
庵シムサ身身直スグとときハ新のまづうざるうごとく君もぐか  
時ハ臣もぐよか親仁道シムサをばすの仁道よわきと  
一正シテき政道セイドウをばく游カクり万民マンミンをひあくして候。ざ  
たとへ志雨志うさハ國をよくうるやせども道行人ハ道の泥ね  
水をふくもぐど一秋の月既シテくるハよきのものあをど審  
査シテする者ハふくもきのと無事ムジをしてハき身は病アツがるす顎あご  
歯シテ審シテ人ヒトも無事ムジとなりうりハくばくかす余ヨリをばくくらひ  
死マリぬ。幸ラハばふくあぐもあくもぬをむすハやまぬもゆえ  
たとくバ戸ドヤドの酒サケよ多ひてハあーき事モノ教タフかまタフとあり  
かづく事モノあくまタフの主人シムサもおひてのまもるづかー

一十町の田畠タラモ一者八町のうち限シテせばゆくらかもの  
十武町の分限シテ色カラを好む在よ色カラのう不足ムツヅとぞそ  
やいよく一年中シテ心ハラるとき毎年エニシテ不景ハラハラ不足ムツヅが限  
あり著おどもる事モノをあつておまうはうちハシマとくをべーも限



お魚よちいそく着てハ船あらむとよくもハ馬車の御車石  
なりとお時ハまよすたりざるはむきほりとぬをとみを  
ぬきる車をもとと着る老ハきはりて遊歩多一といへり松  
山とありナ武町おくる老ハナ木町の着一せしとく廻とも  
くともうるじとぞきや世間の人よかてひ難いりふうことを  
考セバせじるかすよく分セあかてうらしく書じかくたゞ  
ざる人ハあまびくびと同馬温云の室ひ一ハ毎年賀まかく  
喜モ慶代ハ老翁のね入あき巴も分キよどむゑ考代され  
ありかくぬくものと年く賀るせに著一と不意の罪ある  
物の用よつての店一有書よいとく十町の田畠お一ものハ  
五町のう一せして賀りまきを先祖の追荐よつてせひ  
仁義とぞべ一正道よつて年月をおこうと所もゆくうふと  
徳人たよ一権長の家とあバ子孫も繁昌よほぐくべー  
一大きよ富る附半おほくしてあるドのくよゆき深かひりの  
なおり人の出入多くしてむづう一金よ年穀多きゆる邊城の  
用糸よ乳とつくりがもくこ貢家坐も幸れもくかだと  
坐のうむべし事務少ハ居るとも金殿やも居るべうば年を  
むるゝ諸河の水を引く大海上ハ増減な一川ハ妙る多き  
もとゆあゆり多きとすとすとすとすとすとすとすとすと  
筋と筋とつとあゆり多きとすとすとすとすとすとすとすと  
て換減なしやううによつきハ身を守る元とくとこばくを  
ふきハヨギひとまゆく縁とゆきのと  
一人の毛より一粒の酒を濁ても鳥着ハからくやくものなう

酒さけハまうめどりどりともおくる私の志しハ済すくむの事こと第一  
えしぬきあんバ私わたくしハ私わたくしを如ごとく謝いたすと仰おこなひよすをうすり一擧ひとハ  
かへしゆきあん志しハ附つりつて大おほ報ほう多く附つりつて大おほ報ほうをおこなへ思おも残のこす  
うけく報ほうせざるものハ大おほ罪ざいある也ゆゑ現あらわすもハむくはばどを  
あ東あづかそ夷やそあむむといへり告人がじんむかひとひすりを誓ちかうる  
冠かんむりをつともどりぞ恩おんをうけく恩おんとをぶはぬ之仁者にんしゃハ一日いち  
まことに命めいをもつといへと

一人ひとり恩おんを施ほどして他ほかを志しく人ひとハ子孫えい繁榮しづら景けいみほくだだ一子孫えいの  
さうへおとうとうへも先祖せんその長なが恩おんよりびび一いもくひひを連つある  
きのこもやさハ家いえ男おとこよむうひと成なきハ子孫えい一いもくひひべ  
一族しやくとうけく報ほうせざるものハ堂ひろ堂ひろ人のひとへもまハ礼まことのあ  
財ざいとモて恩人おんじんハ利り便びんのるよ恩おんをもつるあり熟じゅくて敬けい卑ひ  
底そこ生うあきあきばらよせんとやふんあてもすくを二ふたきよ欲のぞめめき  
うちと初はじおほらととバ志しを損そんししあやももをゆゆをものなり  
ふ金きんとそくへくる老おハ世よは教たげ多た一い智ち便びんをねまゆゆを  
ゆそ恩おんを報ほうむるものものハまれなり

一いもの半はん十じからからばばここががくくあとあとハはままいい入いとりとりすす方がの  
食くくくはよよひひざざすす半はんああききバ病びおおるるここののととく  
よよだだハハががののるるありあり後あとへもくくててややももハハ久くくくままー  
ひひももおおううててははおおききんんととももののつつぐぐアアももー  
一人ひとりははつつああそそももくくののハハ天あまより幸さいををづづああ人ひとはは摸もく成なるる  
ううああそそああひひややざざるるもののハハ天あまより幸さいををづづああ人ひとはは摸もく成なるる

卷之三

卷之三

まもんへつまきハ都合へつまわうごと一越人をあつともむ  
つぐ身をのづむよめじ

一大き成所新ハ無事ハハシテざる事のニ意よせんとももハ不妙哉の  
ゆとりひ之悔氣かくづレツモ毎日つとむる時ハ一生少ハ篤人  
おどろくほどの事をもちこむ庵一年を度一月を繩ハ  
井利をまもれ教年比久道ハ人をうづとい一月を月を  
えまひてこそ大功也かびきあき

一人の大義ある僧仰ゆめきりとえてうるましめりかと謹持まへきハ  
同よくしてあきも功德をねがふと人々の見え  
ても字サカナとも役持せんせんしも大慈だいしもすりありがども  
あくびゆきのとあきをさやうの人祠じしやうのとあくびもほり竹  
想して祠じしやうをさむよひぬきてつともする事せばほほきもすり  
あ子のちかる西の事にしこをとてほんよのくるを一又  
何事なにごかあらばあらばくあめのひ變せまくね成終乃  
祠じしやうのとあくびとよべー

一万石いちばんごくをいたいですき時ときふしてあき附つきハのぞーのぞははせつせつききあ  
きの病びょうをうや死死する事ことの三つさんつつであきとておきは  
生せい徒徒滅めつのうきはとつとつはとつとつは游ゆの水みず化か死死るがくがくーーあを  
らくもやも時ときなーなーもーもーとごんすをハききんきんとままでじはと  
えくえくばもあよせぎすぎすせよよおもねうけるハ死死る  
はひよ行ゆ道どとハうひてわかざうさう歌うたうとハセハギアアーーを  
げううのふゆくたる人ひとのよべー

一人ひとうてれかきの父お父おなな又い人ひとよりよき恨うらをぬくむす  
あきもお礼れいももあききば人ひとややくくなながよ人ひとややくく和わくく  
すききままききゆゆりんりんををかかききのハ必ひちちききううひひも

庵へまことにあまにいのるきの多く庵ざるを病もよりを  
のもうとれふくものぞざる半とれしもがごくほ惱  
おほづか庵へ

一人のとの老魚をば誰もあきども身のとの暇をばある人か  
老魚のととんぐあるをわありある人といふて老魚  
ちのえふうきともあくばみづん此五味をもあくば差能の  
つゝあきをもあく身の暇あくねともあくば年の中ゆ  
ともあくば病の身は侵へ侵をともあくば死のちうときをも  
あくばもう候の身はうかともあくもぬして人のそく  
是をもあくぬこもう身の身につくあきとあくばあんじ身を  
あくぞうする又年もあくとあくばあんじ身をやもくちの  
らひて候事とも然ハざる候の身はうかとあくば今より終  
ふととあくもくちきりにもあまざる人も身を教せざるよ人の心へ  
ああく三入て候はぬドソハ心なし

一ねむくざる身のハ仏よりあく、かざくことあひて志をやぢか  
さざる身の世よ多々道を引かざるもの身をかざすも爲  
一もくひむよ候花を一枚をす身よ草るハやもし志ハ  
多幸の身つれりす身あく候をほくすて身よ草り一葉  
大功德をゆく身もん一叶り候女グ一炮ハ長者の方炮  
あくも功德つれきゆく草るハ多幸よりまご  
ぞ志の身よモベー

一魚とあくばもうなりとをなをばくば小魚をいぢハぬ  
ものハ必も大魚へうつてやもく身とバ一物の務員を是  
もづく身と身のハ根ハ万殊の務員をもするが如

一歳となをきのハ必ギ万若をひひ家のみよあうじんまで  
きぐるん半と死ゆきの也

一歳うにふへをもふ一方のほひよらうせーはにとしききの  
なりふ十年くまにて十九年比那ハ初といへどもひまご  
あきすにあの方ねとか不そんとちる人かしやまひあ下  
まふとも日數くらといそぐがおとく年月をよせぬ  
とくうとき時より乳をつめても多くは物あきやうに为  
ををおべし薔薇花枝よくらむうごとくをもくもくさきよ  
えくま車船へおくるべき事

一百九ハ堪忍ちるを考一とちるありよくやまちのをざれバ  
詠歌もうるすれりとくく被ふぞよく志のぞざれば艶  
せきとかり世の本わらじうんやんうをきもんり  
あくに朋友とよどけるよよくうんやんからきをばあドリナ  
もぐるをくまづひようんやんからきバ家みぐと  
一すみか一ふとわとのこゑすうんやんうをきバ必ギうん  
屋を雇へ管人轡車わらじうんやんはくまのれを考す  
小ハ法くまのれ一策のあききくへあひてやく時  
病を治へ戒行もよくききうちぬをばさとすをうる  
魚人すりよき人を魚に見るぬよき人もくくぞ  
いを魚人とうる車船へよく堪忍ちるを考る  
りすうりつまハざきば魚人すりうをうりあくものなり  
たとく天よむうく嘗をたくよこうよあくるを  
あきやんへ川そとをのせうが男へおけりるがとくへ  
はとくうるぬをやまひよやまぞへてあんの大きえ

とあるを以ての事ハシメバ其の如く其の事なり  
人の魚にハ火をあさきの如きがどとこそするハ窮れること  
ありば熱しもんををこうむるあはりぬやうに  
持度へ一切のちゑふを却後くとせぬめをバ一切の  
魚を手にすそひる事おしんの多魚せをときやゑをもてへ  
ものぞきつむなり

一 節ははふれやいまかや急はとつるす事一魚肉  
をつゆよみ事余よ魚へ六塵よりまつても皆多然を  
ある書小ハ財の多きほどつまをまのぐすも又事と云  
一金をほんじる事へやれるよきハめくうしりよのあす  
一宿とゆく事もよする事叶へ只日によ法徳をもつる  
のをよ孫によく猶もて長久よそある之極法徳といひ六  
正法小しとく人へ慈悲をやどら毛をどのみへ法徳残  
法もハ正達ハ福力ハえもどもよどもよ孫へむえひ又事世へ  
むふべしとくバこの事ある事よまゆをまく時実へ  
きよども本をもむらくる事實をとるがごとく一處すと  
法徳をつむ者もあらよばく又へ一旦ハ魚人よかそあ  
らきよのあきだき法天のあひきとくゆゑ急よほぬか  
徳とあるをのと魚人ハ萬物ハ威勢つよく邪を以て  
要をやづるやゑ一旦ハ徳よもよどむにはあと取くわろ  
ざるこまとくバ歎ハこの事ものあきどもよもよるよ  
もそ年もうもハつもよもよざるやゑ法天がくくりそ  
古ハやうううかく歎よくをてハづくと一旦ハまくをども  
ほぬよやがる年もかくとほくくびと

一のる高祖の書といへんハ陰終の事と先もひそかに  
まよをも次よりゆべしせるのまざハおひとも夷またぬナ  
あきど陰終の事もあひて夷よまくぬ人あらんやね陰終を  
あよとりふハ義果よ御さんとつてぐつてもむすしたとぞ  
うくぬきをも本の何をより切てもうかたるおとぞ  
えぐどく日ひ若きをバ陰終の時若の方へ押もむく  
又いそくもグ門牙至ハいとぬをやと船ハ袖もすせらそ  
仏道を絶びべー一生むかーくもく万劫くる半  
あつと大慈わる人の靈光絶滅の意をもくれ此身乃  
あよ若の身もとをうゑるハ滅まきよりあらぞや又いそく  
まよひ人百業まで生まうとと生滅の理をあらば仏名  
をも悟せど仁義をもそもきーものハ一日のきてはをかり  
半身のゆゑ百千方をともとぞり

一皆人子にゆ一室よ相き男をつひ對るものを云病とく  
利をととあ人をむきがりて歎をか一妻ふホのゐに  
日暮罪業をつくる半汝あきそりあらむやきを年と  
暮してくらまうけくま半汝とハ只年のをぬると云は  
むとの二ツなりとのある半をみやうなう色少くあら乃  
あらとゆく御宗をかべ一來ゆみの元史あらば  
一天竺すある大士ハあらが一毛ぢねひぬとバ冥途より一蟲比  
つひあるとおどろきんをのどにせむ道せトあらむとぞ  
叔くらもあまかうとを再びこへぞむひよあハ如く蟲  
ちきの事獨りもかどハ皆めいどりのつひとといへ

又ふ職うもくありま勢やつもやゑきのまをもー 檜根  
よばく詔行つざきどーすまうらもんいづきうけはよおど  
詔うざるハなー五歳あるもハうやうの事むようくせどろ  
をけたと若男とあらばーて年月のれときまたをを  
家をのり因景つこかくしも若男まへぬとやひんせざう  
やまと紙引手とおく詔うのまえうめく年のかども  
まもとてくせどもとのつもとハちぢひるゝとま  
のを詔うる事ゆに墨報つこくもる人もの身よわく  
えぞ若のあまきのハミヘクビに青ようき年の御そが世  
世の中ハムモくて便人も耶ー

一母性ある親をもよくあらざが子の孝行をあつまはる人  
年多の母の祝をばないが、内少くの年をも見ひだ  
西川もりやせ親の娘をあざかひづとあつもやう教  
多一あらざうやうれしの西翠ともおうづーその時ハうつそ  
親先祖をもくわむるもと親を不孝せしものハ天慈の  
固里あく又娘子よ不孝せしものと父ハ父うじどりす  
子ハ子の道をほくもう詔

一古人來本を詔をもぞーく詔行あさば詔行あくーく  
魚行へもちがバその時の事づきハいくぞくあらんある事よ  
いもく人の心れ済みる事の事づきハいくぞくあらんある事よ  
魚を薦せほくらんと思ひて事づきを要瀬よまことへ事をばめへどに  
思ひかまく又事とくせとくせ、いもぐ毒のうちもよる事づ  
今魚を詔をもぞーくして、毒を詔をもぞーしてくもふがく

一世の入樂せんとあらゆるは食取よが生くをぞくが成  
くるもするものと有利の事とややそ奢りにまつて  
も波打きとあひて云ふある所ハ男めやもく人やもさうも  
あくべて、又りてやまとあるものと十倍ハつらひやもく  
一箇ハとどあざく、おもづれぬ物とぞとらんとく且<sup>く</sup>善若  
患とすつひやもき難例のふとこのまんや八卷のなへ  
生きて樂せんとやひともううハ余のまごときえより種々の  
あやをあき、清津と移びひてわざよきすハ一つもなし  
一生の内<sup>えん</sup>事務<sup>じむ</sup>と金取<sup>きとり</sup>とをもするハ天の御幸<sup>みゆき</sup>をぞく  
くもんとやどぐくゆゑくほのまよしと、まの事と義<sup>よ</sup>  
もあり程あくまじーとそも身をくるしやバ有利のせ事よ  
ゆき生氣<sup>せいき</sup>ともねきるよもぐー

及ばざるをばあげく人なり かくちはいもとのくわもとふのぞむ  
こそにわくまき肩固こじめくらは生もつてあれ、ばなまきこくせん  
なへゆあわせばなわるきみとまきばたびの人日本ゆふの賢  
然をばあむせどもものよ わざば書のせば

一歩すすむをひきわせば辞退せば  
又トよりのまゝものばかりせわとつよとすともべ  
一百病ハ氣より生まるといへども病氣ハ血ちもめぐらぬ人の  
心こころ多癡ぐちめでるが爲ためわざまだざまどきりと若小おづくのすすとも  
強ごわりてうれしく氣きをつくるものと袖そでうちもとをじきするも  
あくまでに若わかよもるは速はやく氣虛ききききとせざり有病うびおこす  
て済すくせ治さしむるが爲ためこの事ことをよきもあり

つまむてとせば善ふあらまづき小まことかくら年少人に  
えまむて是娘ハシヅラのすりやといへしゆを百万の金あると之  
が金を金をじきそふようるからう御事ハシバ金ハ百万の金  
小まづぐとせひとよくお持べー金とくとてハレの如も  
走るやも一人ハ金をと大半わらひハカ一金とくとてハレの如も  
世男は若者か一力よがどうくはむかさざりて氣をぬく  
ありふをさざりて金をせぬれやどもとバむかさざりて氣をぬく  
なース金れちる半とものたねのきハアリ一力あくバ氣をぬく一  
悪魔の如く一金をあまきハ氣をぬく一力て走る  
も金を金を大切よせひといろくの善男をもや名走るも金を  
う一力走りあり春山もくづきとと同めあドロドロの勢をぬ  
がんかく走一力と亂どくまぬせうこもるが才一の巣生

一火門の世事多き中によく文道に入つての意味ゆうとも  
か一是詠のたまこと一度學問入て是よもさん人行見れ  
よきゆくも捨てつきあんややまとへバ一日よ小うの程を  
つぎを勤る者も是をオ一とせども始よたらの利をも  
稱りぬきバ右のよきとほはつねくおひ持やせれど一  
經論をとくもわむは功徳をぬそするは尾をると  
あつまえバ大工のまみのハ本の曲とぞ事もあかず内界  
書藉ハ本の曲とぞ不にあくまつても本の曲をあ  
さむハ物の差うもとづき書藉をも讀くもとなふさばハ  
何の役をべきや用ると持るとハ済失て缺の違一文ハ書文の  
師といふ文書をとく物も事も書とば廣く是えて  
身の行ひをなやさざる者も是ハ世のことをよびに海猿を起

浦野あらびとひかべー絶書のねよある。洞庭東よ食ふ  
浪ちば縁して信モベーとむ行舟の至人モもよき一云ハリ。ふ  
事あり仰く是とすまふともむ

牛あり乍さう多く是これをすますますともともだだ  
一いち忍しのかかるる祝わとと之のををももめめ御ごよよそそひひ天てん

思ひて祝ひてやまもまめ門よほれ天道ある肩くじうばす  
て十にへたと祝の頃は子のゐよた理よ叶ふと思ふだ  
やうぞあれ、祝の子とゆよまむもあらきすあらきをも  
あれと日祝ひてうわかとばま深切の事ありしりく  
ひゆ教判あきび一言まぬやそもみのゐよあきた理ある  
ごゆれ一万里ゆく傳云ありとも祝の頃ぞとつてくま  
身ゆるあらへ道豈懸熙経へさんや神仏のあくわい  
僻もも生よ長言とゆく身のゐよあらぬ、一も神よも  
身の書するとゆく祝とあらざりもよ宵く人の青と黒  
写せゆまへ坐して御詠をねながらもちゆを夢たせら  
うて故人を絶はりあらかと勤ひづきと博識人よ聞く  
一首の歌とゆく音うまうに

とあらねど親とやひかばせよまき人とつもを  
竹の葉もひづりきゆもあく唯親のあとあへぐをやうに  
日和ひまづけく親の事とあきとさうが夢みる  
事とあ鄰と鄰第一箇のゆうよとし氣きよ仰く聲り  
もの薄うへぬあまくお貴人の内内よ程と火のえは重ねてよ  
えりく簾幕よまくと隠すもい言津でよくまほじ

画工

南江八尾貞

彫工

遠藤儀兵衛

芦野靖次堂



樂天堂 佐藤了翁

藏書

